

はじめに 学校法人 東京医科大学 理事長 伊東 洋

本学の起源を記す書き物は少なくありません。年齢が加わるほど自分たちのルーツを知ろうとする気持ちが強まる事は自然の理であります。今回、故長 委三美先生が残された「東医の礎」は極めて貴重な建学迄の記録で、この記録がご子息、長 亨氏(昭和十九年卒)から本学に寄贈されました。記録は日記風に書かれ、当時の状況を知る事が出来る貴重な書である事は間違いないでしょう。しかも長 委三美先生が学生団の牽引者の一人であることから、どのようにこの学校設立問題が進められたか興味深いものです。5月に同盟退学の事態が起こり、数ヶ月後には学校設立が高橋琢也先生から学生に伝えられたそうでもあります。この間の世相を反映した各界の名士、医学・教育界、或るいは文人などに及ぶ面会の記録には今日まで歴史上の人物と思われた人達が極めて身近い方々であった事が判ります。此の書の中では必ずしも学校設立や学生運動に賛意を示す人達だけではないのが判ります。当時の学生からみた世相、地位などを反映した文章もあります。文中には其の思いが幾つもでて参ります。恐らく牽引者のお一人であった長先生は欣喜と奈落の底の味わいを繰り返された事でしょう。

日記のすべては必ずしも完全な物でない事が判りますが注釈を入れつつ、生化学の友田燁夫教授が考証してくれました。多くの古文書に近い日本の書物には東鏡などにみる様に落卷があり鎌倉武家時代の貴重な記録が失われています。此の書物にはやはり言葉のやり取りに少なからず読み切れない文体があ

る様です。しかし活字になり製本により一層、貴重な書である事に疑いはありません。一方、順天堂病院の始まりを佐倉順天堂佐藤強氏より文献を頂戴し、其の当時の医学界や官界、教育界の人物の交錯を読んで参りましたが斯界の錚々たる人物により日本の医学の礎が出来た事が判ります。その順天堂の流れの中で佐藤達次郎先生は本学に質実剛健の学風をとられたそうです。東京医科大学の精神は既に此のときの自主独立が主柱になっています。大学の関係者の方々が開学の歴史と学生の志をお読み頂き、東医の精神にふれて頂ければ幸いと存じます。高橋琢也先生の墓所は雑司ヶ谷にあり、彼岸にはお参りを欠かしません、今様には千の風となつて大学の発展を空から見守られているかもしれません。

最後に莫大な資料を提供頂いた長亨先生、資料整理に多大な努力を頂いた友田教授に心から感謝いたします。

「東京医科大学建学の礎」に寄せて

東京医科大学 学長職務代理 下光輝一

このたび、日本医学専門学校を総退学した四百五十余名の医学生の一人、長委三美氏が書き残した貴重なメモを整理し刊行する運びとなった。

東京医科大学設立の経緯は、「奮闘の半年」、「東京医科大学五十年史」、原三郎氏の「東京医大五十年の歩み」などに詳しく記載されている。これらは正史ともいうべきものであるが、長委三美氏のメモは、公開されることを前提として書かれたものではなく備忘録として書かれたものであり、正史には書かれていない貴重な情報を後世の我々に明らかにしてくれている。

紛争の開始と先鋭化、血判状による同盟退学、東京医学専門学校開設というめまぐるしい展開の中で、驚くべきことに青年医学生たちは連日のように、官界、学界などの名士と精力的に面会し、学校側の不当な対応を訴え、学生たちへの支援を要請している。訪問先は実に多方面にわたっており、今日では考えられないことであるが、当時の要人たちが気軽に学生に面会し、談話する様が、生き生きと描かれている。日本医学専門学校を総退学した四百五十余名の医学生の苦闘に対し、彼らがどのように感じ、どのように支援の手を差し伸べたのが、良くわかる。長青年は、要人たちの言葉を、テープレコーダーのない時代に、一言一句正確に記述しており、見事である。

例えば、当時の第一級のジャーナリスト茅原廉太郎(崑山)氏(万朝報主筆)は、「日本医専の学生が殺到してこの静寂の生活を破りました。私は、彼らが絶望的勇気を鼓して破壊に徹底せんとする態度に驚きました。」とその強烈なインパクトについて語っている。また、学生たちは、これらの指導者たちと面談することにより、「義は我等にあり」ということを改めて確信したのではないだろうか。東洋大学講師高島米峯氏の公開演説は、実に説得力がある。「この五百の学生が皆医師となり、たとえ三十より六十まで三十年働き、日一人の医師が十人の患者を救うとして、月には三百人、一年には三千六百五十人余。三十年に十万六千余。五百人にては驚くなかれ、五千四百何十万と。六千万の人口を有する我が国の五千何百万の人を救済するのであります。かかる点よりしてもこの問題たるや国家の問題であります。」

しかし、この戦いの中でもっとも学生に影響を与え、かつ全私財をなげうって献身的に学生を援け、医学校設立に全てを捧げた人は、元沖縄県知事高橋琢也氏である。高橋翁は、同じ広島県人である長青年に対して勝利のための戦術を授けている。

「この重要問題が社会に知られんということは残念である。……大いにかかる人の意見を援助を仰ぐべきである。決してかかる問題に対して証介等要するものではない。諸君は大いにすすんで行って尽くすべきである。……血涙録なんか出すよりも大いに話すことがいいと思う。書いたものなんか自利のためなら見るが日本の社会ではかくまで進歩していない。赤心、誠心のこもった話であった

ら鬼師も動かすことができるのである。同じ義太夫でも大いにその語り手により如何ようでも聞かれるのである。大いに委員を派してあらゆる人を訪うのである。(傍線筆者)・・・あらゆる有識に願うのである。」

物事を為さんとするならば、まず人に会い、面と向かって情熱を込めて縷々説得することであるといふ高橋琢也氏の言葉は、青年医学生達の心に直接響き、彼らの行動を決定したのである。医学生たちは、いっせいにそれぞれの出身県の県人会の名士たちに面会し、支援を求めていくのである。

「奮闘之半年」によれば、当時のメディアは、日本医専問題や日々の学生の動きを逐一報道していた。世間(社会)は、血判の盟約による同盟退学と一糸乱れぬ団結力により新しい医学校を設立していく学生団に対して、同情的であり、また、赤穂の四十七士をイメージしていたようである。そのように考えれば、名士たちが、学生たちの訪問を待っていたかのように招き入れ、面談する様も理解できるのである。学生団の幹部であり後に東京医科大学薬理学教室初代教授となった原三郎氏は、その著書「東京医大五十年の歩み」の中で、「そのころ著者らは、気持ちの上で赤穂浪士の快挙とか、中国革命との繋がりを感じていた。」といみじくも書いている。長青年も、茅原廉太郎氏の私邸を訪問した帰りに高輪泉岳寺に立ち寄り、四十七士の墓にお参りをしている。高橋翁とともに東京医専設立に重要な役割を果たした福本誠(日南)氏や寺尾亨氏は、当時中国革命の指導者として有名であり、原青年や長青年は、その影響を強く受けていたものと思われる。

この記録は、長青年をはじめとする四百五十余名の本学設立への血のにじむような努力とそれに共感し私財を投げ打って支援された人々の心意気を後世の我々に明らかにしてくれた。本学創立百周年を迎えんとする今日、我々は先輩たちの努力を無にしないよう不転の決意を持って本学をさらに発展させるべく努力していかなければならない。

最後になったが、このような貴重な資料を保存し、このたび東京医大にご寄付を賜った長 委三美氏のご子息 長 亨氏、ならびにこの記録を解読しまとめられた東京医専・所長 友田燁夫主任教授(生化学)のご尽力に対し深甚なる感謝の意を捧げる。